

説教

人生の影

<列王記下20:8~11>



金忠洛牧師 (堺教会)

私たちは3年あまりの間、コロナによって時間の止まりを経験しました。観客もないオリンピックもしました。街中には人影が見えませんでした。学校も閉まり、商店街も営業できませんでした。病院に行ってお見舞いすることもできないし、愛する家族であっても会うことができませんでした。教会も同じでした。コロナという試練を乗り越るために礼拝をオンラインに転換しました。対面で互いに励ましあいながら信仰を共有した信仰共同体にとって、もう非対面という言葉に慣れてしまいました。万事が益となるために共に働いて走って来たのに、今や非対面という言葉と共に各自が自分の信仰を自分が守らなければなりません。その中でも各自の信仰を守るための動きはありました。その止まりの時間の中、熱心に聖書を読もうとする信徒もいました。オンラインという文明の利器を通して、遠く離れていてもともに聖書を分かち合うこともできました。すべてが止まっているようでしたが、すべてが止まっているわけではありませんでした。

わたしたちが3年あまりの間止まっているだろうと感じたようにユダの王ヒゼキヤは時間が止まり、太陽の影が10度戻る驚くべき経験をしました。ヒゼキヤは25歳に王になり、6年後北イスラエルの首都、サマリアの陥落を目撃しました。同胞の滅亡を見る彼はどれほどつらかったでしょうか。その時、ヒゼキヤは父のアハズが導入した偶像の歴史を切ってしまいます。このようなヒゼキヤに対して聖書はこのように評価しています。「彼はイスラエルの神、主に依り頼んだ。その後ユダのすべての王の中で彼のような王はなく、また彼の前にもなかった。彼は主を固く信頼し、主に背いて離れることなく、主がモーセに授けられた戒めを守った。」(列王記下18:5~6)

しかし、このヒゼキヤが急に病気になり死ぬようになりました。彼は39歳で、まだ息子マナセも生まれませんでした。この若い王がなぜ病んだのかに対して聖書は言っていますが、政治・外交的な理由である可能性が高いです。列王記下18:13~37を見ると、ヒゼキヤはアッシャリアの王センナケリブに莫大なお金や、財宝、さらに聖殿の柱の金を切り取って、贈らなければなりませんでした。それだけではなく、ラブ・シヤケは神様とユダヤ人を嘲弄し侮辱しました。

ヒゼキヤはすべての嘲弄に沈黙で耐えます。民にも「一言も答えないように」と言って、この苦しみを耐えるように戒めました。まるで、ピラトの法廷に連れて行かれ、侮辱されたとき、沈黙したイエス・キリストを思い浮かばせます。このように苦しめられたヒゼキヤはついに死の病にかかりました。彼の時間は止まってしまいました。ただ、神様の前で涙を流し、祈ることしかできませんでした。

奇跡が起こりました。神様は預言者イザヤを通して語られました。「わたしはあなたの祈りを聞き、涙を見た。見よ、わ

たしはあなたをいやし、三日目にあなたは主の神殿に上れるだろう。わたしはあなたの寿命を十五年延ばし」(列王記下20:5~6) そして、神様はそのシルシを見せてくださいます。日時計の影を10度戻るようにしました。前に進んでいた太陽を止められたわけあります。

なぜ神様はこのような奇跡をくださったでしょうか。わたしたちはその神様の御心を考えるべきです。それは、慌ただしく前だけを見つめ、自分の欲を満たすために走っている人生の中で、自分の影を静かに眺める機会を与えてくださったことあります。25歳に王になり、偶像を破壊し、ただ神様の御心に従って国を引っ張っていたヒゼキヤは、国際情勢によって迫ってきた危機のことで倒れてしまい、アッシャリアの王センナケリブに対する怖さをこのように述べます。「主よ、耳を傾けて聞いてください。主よ、目を開いて御覧ください。生ける神をののしるために人を遣わしてきたセンナケリブの言葉を聞いてください。」(列王記下19:16) わたしたちもこのような祈りを献げています。神様が自分のことを見てくださいと、自分を脅かすことからどうぞ守ってくださいと切に祈ります。

聖書の中で太陽が止まることは2回です。まずはヨシュアの時代です。そして、長い時間が経って、ヒゼキヤの日時計が止まりました。その影を通して人生の影も顧みる機会を与えてくださいました。そして今日、すべてが急いで動いている全世界を神様は一瞬で止められました。自分を顧みるようになりました。わたしたちは止まらざるを得ませんでした。自分をちゃんと見なければなりませんでした。

私たちはコロナの危機を乗り越えて、もう新しく出発しました。すべてが自分の席に戻ったように見えます。各教会は礼拝後の愛餐を始めました。礼拝以外の集い、聖書勉強、交わりも一つ二つ再びスタートしました。ヒゼキヤ王も同じでした。15年間寿命が延長され、熱心に働きました。水道を作つて城内にまで水が来るようにしました。敵に包囲されても水を供給するために地中に500mを超えるトンネルを作りました。すべてこの時期に作られたものです。わたしたちも同じです。止まりがただの止まりに止まってしまうことはありません。ヒゼキヤのように再び立ち上がるべきです。むしろ、以前よりもっと強い信仰者になるべきです。止まりに慣れてはいけません。

神様は預言者イザヤを通してヒゼキヤを励されます。「わたしは主、あなたの神。あなたの右の手を固く取って言う。恐れるな、わたしはあなたを助ける、と。」(イザヤ書41:13)

同じように、神様はわたしたちにも力を与えてくださいます。今や、その神様の力によって新しく立ち上がり、神様の御国に向かって力強く前進する皆さんになることを切に願います。



人権シンポジウム開催 「共に生きる命の天幕広げよう」主題で

先日の9月18日（月）に四年ぶりのKCCJ人権シンポジウムが社会委員会・RAIK・KCC・西南KCCの四者共催で開催された。

主題は「共に生きる命の天幕をひろげよう！」で、副題は「歴史に向き合う移民社会の宣教課題を考える」であった。

開会は午前9時、李根秀社会委員長によるメッセージが語られた後、今回の講師及び韓国からのゲストである元龍皓NCC K正義平和委員長と朴永樂部長が紹介された。

スケジュールは非常にタイトで、朝9時から夕方5時30分までに4つの発題（①入管法改悪の諸問題、②青年宣教の課題、③関東大震災虐殺100年の歴史、④公務員就職時の国籍条項撤廃運動）と士師記19章の聖書研究の発題であった。講師はそれぞれ①は佐藤信行RAIK顧問、②は大阪教会の梁陽日長老、③は金性済NCCJ総幹事、④は横浜信愛塾の大石文雄氏の4人であった。それぞれに確かな経験と情報による深い内容の話であった。また聖書研究は朴栄子関西地方会会长が担当し、説教テキストに用いられ辛い士師記19章を取り上げ女性の視点で研究発表された。最後に、閉会礼拝は中江洋一総会長が「いのちの木につながる」という題でメッセージを語られた。

まことに多くのことを考え、学ぶことのできた集会であった。

（報告：社会委員長 李根秀牧師）



讃美とみ言葉の夕べ開催 13教会が集まり4年ぶりに恵みの時間

関東地方教会女性連合会主催の2023讃美とみ言葉の夕べが、9月17日（日）午後4時から東京教会において13の個教会から約210名の参加で開催された。

1部開会礼拝は金根湜牧師（ハンサラン教会・関東地方会女性部長）による「 하나님을 찬양하는 일이 선함이여」（詩編146:1、147:1）という題で説教が行われた。

2部讃美の夕べに入り、13の個教会が各自準備した讃美を神様に捧げた。審査の結果を待つ間、襄秉胄執事（川崎教会）の特別讃美があり、審査結果、横浜教会が優秀賞、川崎教会が努力賞、人気賞を船橋教会が受賞した。

コロナ禍で3年間開催できなかった讃美とみ言葉の夕べが、特に東京教会にて開催され、13という多くの個教会の参加があった事、またみ言葉と讃美で恵み溢れる時間を与えてくださった事を神様に感謝したい。

参加教会は品川、ハンサラン、東京、東京聖山、横浜、西新井、東京東部、船橋、川崎、横須賀、東京希望、東京中央、つくば東京（以上13教会）だった。

（報告：書記 李敏禮）



全国聖書講演キャラバン実施 西南地方会からスタート

信徒委員会主催「全国聖書講演キャラバン」が9月10日に西南地方（会場：福岡教会）を皮切りに開始された。

西南地方の聖書講演会講師には、総会長の中江洋一牧師を講師に迎えて実施した。「いのちの木につながって」（ヨハネ15:1～11）を主題にした講演ではイエス・キリストとつながることの意味を学びながら、自分たちが尊い生命・人生を与えられていることを自覚して、共同体である教会において隣人と向き合い、支え合っていくミッションを發揮すべきとのメッセージが発せられた。

また今後の教会運営に関しても、経済不況や社会的分断がある厳しい時代だからこそ近隣の教会同士のつながりを進め、大胆な組織改革を進めて行くべきとの提言もなされた。

講演会終了後は参加者同士の交流会が持たれ、福岡県内の諸教会をはじめ別府、熊本からも牧師、長老、信徒が多く参加して盛会で終えることができた。

今回の講演会実施には、会場である福岡教会の支援や西南地方会、同女性会の協力があって実現できたものであり心より感謝したい。

また9月24日に関西地方でも「弱さを力に！共に生きる教会をめざして！」を主題に京都教会で開催される。この聖書講演会は年内11月3日に大阪教会でも予定されている。

（報告：信徒委員長 梁陽日長老）



オリニキャンプ・ブドウ狩り 4年前に企画し、コロナを乗り越え開催

関西地方会教育部主催で、2023年9月23日（土）にオリニキャンプ・ブドウ狩りを大阪府富田林市のサバーフームにて行った。

4年前に企画して以来、台風やコロナ禍の影響によって中止されて来た。その思いから、今回のテーマを「コロナ禍を乗り越えて…出会う・つながる・一緒にやってみる！」に決め、特別講師に清水のぞみ先生を招いてプログラムを立て開催された。

開会礼拝に石橋真理恵伝道師の司会とお話し、祈りに金恵心長老、アイスブレーキングに吉井秀夫長老が担当し、各自の名札をつくるものから始め、9つの教会紹介があり、楽しい讃美と踊りで体を動かした。お昼は、教会・家族単位での活動となり、広い敷地で自由に遊ぶ時間とした。

午後からは、清水先生の進行のもと、ぶどう園でのブドウの食べ放題の中でも、ガラテヤ5章の聖霊の実が書かれたシールを一生懸命探している子どもたちの姿に心が熱くなった。工作室では、ぶどうのキーホルダーをつくり、集めたシールの答え合わせや、感想を分かち合う充実した一日、自然の中で良い天気にも恵まれた一日であった。2歳の子どもから68歳の牧師まで幅広い世代の48名が一つになり、とても楽しい尊い交わりの時となった。教育部長の閉会の祈りと来年また会う約束を交わして現地での解散になった。

（報告：朴愛仙牧師）



「日韓ユース平和フォーラム」 日韓和解と平和プラットフォーム主催で開催

2023年8月29日～9月2日に、日韓和解と平和プラットフォームが主催する第2回日韓ユース平和フォーラムが開催された。開催地は日本と韓国を交互にして行われ、今回は東京に多くの青年たちが集まった。フォーラムでは、日韓の歴史を直視し記憶を共有しながら、多様性を認めつつ、両国の平和な未来に向かって交流、行動し続けることを大事にする。

参加者は青年を中心としながらも、実際は学生から社会人まで、文化と宗教・信条がそれぞれに異なる人々が集まつた。自分の同世代が、積極的に市民活動に関わって生きている姿は新鮮で驚きがあった。また互いに意見しながら平和の為に学び続ける姿をみて、自分自身の社会への関わり方を見つめ直し、そしてイエス・キリストの福音を伝える教会の役割を改めて聞い直される貴重な経験をした。

たくさんの学びの中でひとつ印象に残っているのは、川崎教会のある川崎市へのフィールドワークである。在日コリアンへの心無いハイトスピーチがいまだに激しく続くな、民族をこえて小学生たちがキムチを漬ける姿は感慨深いものがあった。ルカ福音書17：21が言う神の国をほんの少し垣間見たような気がした。

(報告：大阪教会 韓宣榮伝道師)



金載鐵、谷麻理長老将立式挙行 陸順子勧士就任式も兼ねて行う



金載鐵長老



谷麻理長老

去る8月24日主日の午後、東京東部教会で金載鐵、谷麻理長老将立式と陸順子勧士就任式が、関東地方会の各教会から大勢の信徒が参席して堂会長の金伸禹牧師の司会に従って盛大に行われた。

礼拝説教は、李明忠牧師が「奉仕の業に適した者」（エフェソ4：11～13）という題で行い、長老将立式は、関東地方会長の金容昭牧師の司式のもとで進められ、誓約、按手祈祷及び、宣布が行われた。

引き続き行われた陸順子勧士就任式は堂会長の鄭有盛牧師の司式のもと、就任誓約と宣布が出された。

この度、東京東部教会の長老として将立

された金載鐵長老は、1969年韓国で生まれ、2009年から本教会の執事として仕え、谷麻理長老は1973年日本で生まれ、2015年本教会の執事として仕えた。

韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交説文も韓日対照で掲載されています。

●B6版変型・1483ページ

●価格：2,500円(消費税・送料込み)

※お求めは総会事務所へ

関東大震災朝鮮人・中国人虐殺 100年キリスト者追悼集会 在日大韓東京教会で行う

去る2023年9月3日、主日の午後4時から「関東大震災朝鮮人・中国人虐殺100年キリスト者追悼集会」が東京教会で行われた。

カトリック教会を含む日本の諸キリスト教会が共同で行った今回の追悼集会は、韓国からの参加者があり、日本語と韓国語(翻訳本)の式文で行った。オンラインでの参加者を合わせると約200人の参加となった。

1923年9月1日、100年前の大震災で、自然災害とは別に、流言蜚語を確認もなく事実として認定した軍隊と官憲、そして民間人による自警団によって、6,000人以上の朝鮮人(また700人以上の中国人)が虐殺(ジェノサイド)されるという大惨事が起ったのである。

説教者として金鐘洙牧師(韓国基督教長老会)は「ディアスピラたちが歌う希望の歌」(イザヤ書51：11)を語られた。

今回の追悼集会を通して関東大震災から100年がたつ今、私たちキリスト者に問われていることは、100年前に虐殺の恐れから逃げまわっていた人々に対して助けの手を伸ばせたのか、そしてこの100年の間、虐殺の追悼の集会を行いながら真相究明のために努力をしてきたのか。

「地の塩、世の光」として世に遣わされる私たち一人ひとりは主の十字架の前に立ち帰りつつ関東ジェノサイドの歴史に向き合い追悼の営みを継承していくことを宣言した。そして、今新たな戦争への不安が高まる時代に、敵意と差別が生み出す暴力に沈黙することなく、眞実の和解と平和を導かれる主に従う証人として、「最も小さくされた」(マタイ25章40節)いのちと共に生きる宣教の道を歩んでいくこと、また私たちは黙認という自らの罪を悔い改めつつ、少数者を排除する社会の在り方と闘い続けることが宣言された。



姫路薬水教会牧師請聘案内

在日大韓基督教会 姫路薬水教会では担任牧師を招聘いたします。

- ・在日大韓基督教会所属の牧師で、韓国語と日本語の説教のできる方
- ・2023年10月末まで連絡してください。
- ・連絡先：臨時堂会長 韓世一牧師 ☎090-1907-2613、E-mail : zosua2002@gmail.com

講壇掛・ストール販売



在日大韓基督教会ではKCCJのロゴ入り講壇掛・ストールを制作・販売しています。価格は講壇掛・ストール共4色セットで各1万円(約半額)。講壇掛・ストール両方ご購入の場合は1万5千円です。※お求めは総会事務所へ

特別連載
終

1923ジェノサイドの記憶と十字架の信仰(8)

—関東大震災朝鮮人虐殺100周年を迎える—

金性濟牧師(日本キリスト教協議会総幹事)

<8>ジェノサイド：歴史記録、記憶、そして宣教責任



関東朝鮮人
大虐殺(ジェ
ノサイド)は、
私たちに歴史
と記憶について
問い合わせる。

当時日本政
府は、虐殺犠
牲者の遺体を
国策として、
河川投棄、混
然一括焼却、
また遺族らの
掘り起こしを
防ぐため遺
体を掘り起し
て後、トラッ
ク搬送による
処分によって
徹底隠ぺいを

図った。しかし、それでも陸海軍と内務省警保局の記録文書、地域行政史記録文書、そして数多くの、戒厳軍兵士をはじめ、作家の隨筆、市民の日記や児童の作文や絵画に残された証言という歴史記録を、日本政府は闇に葬ることはできなかった。

歴史研究家、山田昭次は、関東朝鮮人虐殺の歴史研究において、国家責任と民衆責任という概念を提示した。しかし、この二つの責任問題を究明するために私たちの前に立ちはだかる課題がある。それは、何が国家と人間をしてそこまでの大虐殺をなさしめることになったか、そしてその責任の真相と所在の究明を難しくさせる、日本という国の人々の歴史の記憶を形成する考え方の根底にある思想的な背景と、その歴史の記憶が今の日本にある問題とどうつながっているかについての解明である。

関東朝鮮人虐殺犠牲者を追悼することの意味とは何か。残された歴史の記録と証言を手がかりに、果てしない恐怖と痛みと悲しみの中で無念の死を遂げた人々とその遺族について、もしそれが自分であり自分の父母であり夫・妻であり兄弟姉妹であるならば、と思いを馳せてみること。そして、国家と社会と人間をして、そこまでの暴虐をなさしめる人間の心の中の敵意、差別、そして恐怖心がたどり着く破壊的な力を秘めた心の闇について、また人間の虐殺の狂気と同時に無感動的傍観という無作為、この事実についてのタブー視と沈黙という約束事を生み出す人間の精神の根源について問い合わせること。さらに、この歴史を隠蔽し、その責任を不間に伏すことによって人間は何を壊し、失っていくことになるかについて想像力を働かせ沈思黙考し、またその思いを分かち合うこと。そのような営みを通して人と社会はどうやってこのような過ちを二度と繰り返さないようになれるかを繰り返し考え続けることである。

日本の敗戦の翌年、『神の痛みの神学』(北森嘉蔵、1946年)という神学書が著された。後日、神学者カール・バルトは自分の著書(『福音主義神学入門』)の序文でこの神学書について

て触れ、その学問的な深さを高く評価しながらも、その神学が「『日本の神学』を志向したものなら、そのことについては大きな疑問符を付ける」と語り、「世界教会的に妥当する神学」を志向することの意義を指摘した。もしそう書き記したバルトのそばに朝鮮人神学者がいたのなら、彼・彼女は『神の痛みの神学』の著者はそれを構想する際、その神学を思索する主体の心に、植民地支配の中で天皇を神とあがめることを強要され、朝鮮民族であることを捨て皇國臣民となることを強いられ、独立を求める者は「不逞鮮人討伐・殲滅」の対象とされた歴史、さらに関東朝鮮人大虐殺の地獄のような現実とその隠ぺいの歴史すべてをつぶさに見つめておられた神の痛みについてはどのように思いめぐらされていたのか、とバルトの言う「世界教会」という言葉の含む意味を言い足したに違いない。つまり、「日本の視野」の中から欠落する朝鮮半島をはじめとする東北アジアへの、またそこから日本を見つめ直すまなざしのことである。今もこの日本が問われる植民地主義とは、言い換えるとそのまなざしを喪失した「日本の視野」のことである。そして、この問い合わせは関東朝鮮人ジェノサイド100年目の今、改めて日本のキリスト教会に差し出されているのである。

國家責任と民衆責任・・・しかし今一つ、私たちは、日韓在日のキリスト教会のエキュメニカルな宣教責任を自覚しなければならない。それは、100年前、虐殺の狂気から逃げ惑う朝鮮人に対してキリスト教会はどこにいたのかについて繰り返し思いめぐらしながら、弟子たちからも見捨てられ、十字架にかかるイエス・キリストの前に立ち帰ること。そして、自らの歴史忘却の中に葬られかけていたいのちを想起し、主の前でゆるしと和解と神の導かれる平和を求めつつ、「新しい戦前」と呼ばれながら戦争に向かって大軍拡が進行する現代とこれからの日本において敵意とヘイトが生み出す暴虐からいのちと人権をかくまい守る避難所として教会が主のお働きに用いられるように、私たちの信仰告白と宣教の天幕を張り直す道である。



東京国際フォーラムで行われた「第100周年
関東大震災韓国人殉難者追念式に参列した
福島瑞穂社民党中央委員長と筆者」